

沖縄への核の再持ち込みと、沖縄を通過することができるといふ「沖縄核密約」が結ばれました。ベトナム戦争のピーク時には1300発あった核弾頭は復帰によって撤去されることになりましたが、沖縄が復帰の際に願った「核抜き本土並み」は表向きで、日米両政府間では重大な密約が県民に知られることなく、交わされました。

【亡霊のように蘇るホーク・ミサイル配備】

メースBミサイルが撤去されてから17年後の1987年3月、県内紙が新たなホーク・ミサイル部隊の配備について大きく報じます。ミサイルは12基、450人の部隊配備という、降ってわいたような発表に対し、比嘉茂政村長（当時）は那覇防衛施設局（当時）に計画撤回をもとめ、県にも「この計画を中止させてほしい」と要請しました。その後村議会では、ミサイル部隊配備は基地強化であり、学校から500mの距離にあることは、生徒、地域住民に危険が降りかかることになり、ひいては戦争につながり、沖縄が攻撃の標的になる、という反対の理由を示した「恩納通信所へのミサイル部隊配備に對する抗議」を決議しました。この動きに県議会も呼応し、抗議決議をあげ、4月6日には恩納小中学校（当時）運動場で軍用地主会、役場、議会、教育委員会、区長会、婦人会、青年会、老人会の各団体が主催しての「恩納通信所ミサイル配備反対村民総決起大会」が開催されました。約500人が参加し、「教育・生活環境を破壊するミサイル配備を中止せよ」と基地撤去も盛り込んだ政府への要請決議を採択しました。

【再び浮上する新たな米軍施設 建設計画】

都市型ゲリラ訓練施設建設計画強行、県道104号越え実弾砲撃演習など、恩納村が基地問題に大きく揺れている中、再び恩



メースBを撮影した月刊誌「オブザーバー」

納通信所にミサイル部隊を配備するのではないかと1988年12月に新聞で報じられました。在沖米陸軍報道部は「沖縄における米軍通信サイト（基地）改造工事の一端で沖縄の通信システムを近代化するデジタル・プロジェクトの一環」と発表しました。しかし、これは読谷村と八重岳との中継地点として機能する最新式のデジタルマイクロ・ウェーブ無線基地が建設されるということであり、ミサイル部隊との関連ではないといえ、基地の新規建設であり、明らかな軍事通信機能の強化でした。

この計画発表から8ヶ月後、基地機能が9年間停止していた恩納通信所に、完全武装した米兵が砲座を積載したトレーラーで入っていることが確認されました。米軍からは地元住民に対しては全く説明がなく、また偽装網が張られていたために中の状況がつかめず、地元では、不安の声があらわになりました。このあと、恩納通信所での米軍部隊の大きな動きはなく、1989年12月、恩納通信所の無条件返還のメドがつけられ、1995年7月に完全返還されました。（瀬戸）

※本稿は「恩納村博物館紀要 第13号」（2024年3月発行）の「恩納村でのミサイル配備をめぐる状況とその歴史的経過」を要約したものです。

※1 高高度からやってくる敵の爆撃機や弾道ミサイルを撃ち落とすための地对空迎撃ミサイルで、通常弾頭の他に20キロトンの核弾頭を搭載可能な、核／非核ミサイル両用兵器。

※2 復帰後は航空自衛隊へ移管され、現在は恩納分屯基地となり第19高射隊が配置されています。現在パトリオットミサイルが配備されています。（航空自衛隊恩納分屯基地HP）

【参考文献】

- ・『沖縄と核』（松岡哲平・2017年）
- ・『核とミサイルと読谷村』（読谷村教育委員会文化振興課 読谷村史編集室・2022年）
- ・『密約の戦後史 日本は「アメリカの核戦争基地」である』（新原昭治・2021年）
- ・『恩納村史 第三巻 戦争編』（恩納村・2022年）